

する60歳を過ぎたフランクの人生観を描き出すには高校生という年齢はいかにも若すぎるように思われる。

第2部も2人。最初が恩田佳奈（東京芸大大学院修士課程音楽研究科2年在学／特級銀賞）。彼女は、スカルラッティのソナタ2曲とJ・S・バッハ「ブゾーニの《シャコンヌ》」を演奏。やわらかな弱音にすぐれた感性を忍ばせる。それはすでにスカルラッティのソナタのなかにも十分現れていたが、それ以上に《シャコンヌ》の全体的な把握のなかで生かされていて、そこから湧き上がる音楽的な格調は一段と上質なものの。

最後が、現在モスクワ音楽院に学ぶ前山仁美（特級グランプリ）。彼女はハイドン《アンダンテと変奏曲》とラフマニノフ《楽興の時》を演奏。音の核を捉えたいくぶん硬質な音感を持つピアニスト。ハイドンのへ短調の主題では、あまりに繊細な息吹きにこの時代の様式との距離を覚えさせないでもなかったが、ラフマニノフになると途端に豹変。第1曲では荒涼たるロシアの大地を思わせる情景描写が、第3曲では連綿と息長く続く歌が、また第4曲では鮮やかなピアノ技巧が展開され、終曲は大いなる迫力で締めくくられた。後半の2人に聴かれたピアニストとしての主張や解釈は、自然な共感を呼んだ。

（2月11日、王子ホール） 河原亨

第30回ピティナ・ピアノコンペティション 王子賞受賞披露演奏会

ピティナ・ピアノコンペティション2006年大会で「王子賞」を受賞した人たちの披露演奏会。

トップは現在、神戸海星女子学院中学校3年の水谷桃子（G級銀賞）。曲はリストの《パガニーニによる大練習曲》全6曲。ヘラ・カンパネラ〈や〈狩〉〉などを含むこの作品は、タイトル通りに高度な技巧と内容を持つ。そんな難曲を的確なテンポ感とアーティキュレーション、各練習曲固有のピアノ技巧をこなし弾き上げた。

次が、鎌倉女子学園高校2年の鈴木美祐（G級金賞）の演奏で、フランクの《前奏曲、コラールとフーガ》。重厚で内省的、かつ宗教的な香りをもつこの曲がどのように消化されて演奏されるかは多分に興味を抱かせたが、これもまた確かな技術に支えられて弾き進められた。とはいえ、この作品が内包